

# Youth Post

2024  
vol.

2

109巻第2号 発行2024年5月1日

編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階

TEL 03-6452-9025 FAX 03-6452-9026

MAIL dan\_news@dan.or.jp

Web <https://www.dan.or.jp/>

つむぐ  
「紡」人を、歴史を紡いでいこう

焼けてしまった輪島のまちを臨んで（石川県青年団協議会・石川県輪島市）

災害食はお湯でもどしてつくる（田中青年会・茨城県つくば市）

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせせたものです。

本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

# その時、青年団は動いた

〜能登のため翌日から支援に〜（石川県珠洲市ほか）

1月1日、徐々に暗くなっていく中で起こった最大震度5強の前震。そして16時10分に珠洲市を震源として、最大震度7の大地震が発生した。これを受け、石川県青年団協議会が石川県青少年総合研修センター等、各所のご協力をいただきながら行った被災地への支援活動について報告する。

◆支援物資の運搬  
能登半島のほぼ全域で断水。さらに道路は寸断され、通行できる範囲も

はつきりしない。それでも1月2日と3日には、自分たちの備蓄のほか、店頭で購入した飲料水や使い捨てカイロ、乾パンなどを羽咋郡志賀町の避難所である志賀小学校へ輸送することができた。

◆珠洲市での炊き出し  
1か月が経過した頃には、規制はありつつも道路が復旧し、珠洲市まで行くことが可能となる。そこで2月11日に珠洲市立蛸島小学校の避難所で炊き出しを行った。県内の青年団やそのOBら有志10人が珠洲市に入り、約200食を振る舞った。被災者の方は笑顔で受け取られ、食後に「おいしかったよ」などの声を

いただいた。また現地では、自宅が損壊し避難していた珠洲市青年団協議会の団員にも会うことができた。

◆輪島市での炊き出し  
発災から3か月あまりとなる3月24日には、輪島市門前公民館前で炊き出しを行った。今回は県内の青年団ほかの協力で15人が集まり、約250食を調理、提供した。当日は隣の門前東小学校で能登雪割草まつりが開催されていた。住民の間にも、徐々に笑顔が戻りつつあることが感じられた。

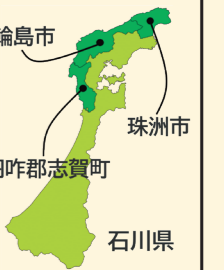
発災から4か月が経過した今も、被災家屋の修理・解体、道路や水道等のインフラ復旧は道半ばである。一方で門前公民館の職員に



温かいチャーハンを食べてほしい

前でも炊き出しを行った。今回は県内の青年団ほかの協力で15人が集まり、約250食を調理、提供した。当日は隣の門前東小学校で能登雪割草まつりが開催されていた。住民の間にも、徐々に笑顔が戻りつつあることが感じられた。

発災から4か月が経過した今も、被災家屋の修理・解体、道路や水道等のインフラ復旧は道半ばである。一方で門前公民館の職員に



●越野慎平さんより投稿（石川県青年団協議会事務局長） お問い合わせ：石川県青年団協議会 Tel 076-252-7178



受け取った被災者から思わず笑みがこぼれる



珠洲市では焼きそばと焼き鳥を炊き出した

# 防災行事に人集め

〜伝統×防災意識UP〜

（茨城県つくば市）

1月7日、筑波山を目の前に臨む田中地区で、田中青年会によるどんど焼きが2019年以来4年ぶりに行われ、地域住民を中心に約200人が参加した。地域の男性35名ほどが集まる青年会は2005年設立。地区の高齢化や人口減少に伴い、伝統行事の担

い手が減ってきたことを受け、自治会が主導してきたどんど焼きを受け継いで開催している。それまで比較的高齢の方が主催してきた時期よりも、青年会が主催するようになったこととで親世代が参加したため、子どもたちも巻き込むことができるようになった。



今年はお年寄りも参加いただける場で防災意識を高めようと、防災食であるチキンライスと五目ご飯の二種

類をふるまった。二種類あるのは、食材によるアレルギー対応を見据えたためである。会長の松崎貴志さん(44)は、「前年の茨城県内の水害では、防災食を食べたことによるアレルギーで、緊急搬送された方もいた。しかし単に防災イベントだと人が集まらないので、みなさんに来てもらえる場所で防災について考えていきたい」と、伝統行事と抱き合わせた意義を語った。参加者からの「防災食は意外とおいしい」「日頃から防災意識が必要だ」との声が、その成果を物語っている。



お問合せ：Facebookで「松崎貴志」と検索 QRコードはこちら→

# 新たな仲間に出会う場

〜出会いで世界が広がる1日〜

（大分県大分市）

3月23日、大分県大分市にあるコンパルホールで「第18回 おおいた青年交流祭」（以下、交流祭）が実施された。交流祭は、実行委員会と大分県連合青年団OB会が主催する。元々、青年団同士の交流と学び合いを目的として始まった。今は形を変え、障害のある

人、外国人、学生など様々な人が集う事業として続いている。今年のテーマは「であおいた〜出会いが起す化学反応〜」。県内から100名を超える参加者が集まり、討論会・座談会・交流会と3部構成のプログラムに取り組んだ。

座談会では、県内



参加者たちで生活する中で感じる生活課題を改善するために「こんなこと（もの）があれば、できれば」を発表し、

大分県知事、大分市長と意見交換を行った。交流祭は、知事や市長に直接想いを伝えられる貴重な場となっている。最後に、高校3年の男子生徒が「知事と市長にどうしても伝えたいことがある」と手を上げ、今年就航予定のホバークラフトに関する疑問を投げかけた姿が印象的であった。参加のきっかけは「友達に欲しいから参加した」「地元で頑張っている仲間とつながりたい」等様々だ。互いの違いを認め合い、新しい仲間と世界に出会う場として、交流祭は続いていく。

お問合せ：大分県連合青年団事務局 Mail takatch2002@yahoo.co.jp

# 地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的意義を明らかにしていく。昨年からはじめた新連載「地域活動ラボ」。三回目となる今回は、東京都荒川区を拠点に活動する「あらかわぼっせ」の取り組みについて紹介する。

## ◆学生主体の子どもの居場所づくり

2023年度全国地域青年「実践大賞」

審査員 榎木 奨悟 氏

(文部科学省総合教育政策局  
地域学習推進課課長補佐)

東京都荒川区を拠点に活動している「あらかわぼっせ」は、立ち上げから1年余りの若い団体だ。彼らの主な取り組みは、大きく次の3つに分けられる。

### ①定期的なイベント・プログラム(月1回)

布と紙を使った創作プログラムやシアターゲーム、ジェスチャーゲーム、クリスマスなどの季節の行事にあわせたプログラムなど、アートをテーマにした小中学生向けのイベント・プログラムを実施している。

### ②常時開放の居場所「ぼっせひろば」(週1回)

地域の中で子どもたちが自由に遊んだり、過ごしたりすることができる常時開放型の居場所である「ぼっせひろば」を開設し、子どもたちが自宅等でしづらい自由な遊びや創作活動など、体験活動の機会を提供している。

### ③行政や地元社会教育関係団体との連携

荒川区や青年団などが実施する各種イベントや事業に参画し、プログラムの提供やブースの出店など多彩な取り組みを実施しており、アートを通じた子どもたちの居場所づくりを進めている。

今回は、2023年度「準大賞」に輝いた「あらかわぼっせ」の活動を紐解いていく。

## ◆自分たちに閉じない活動の広がり

さらに、行政が実施する事業や青年団ら社会教育関係団体主催のイベントへの参加など、自分たちだけの範囲内に留まらず、他の団体が実施する事業・行事等とコラボレーションしているところもポイントである。地域メディアと連携した広報にも力を入れて、「あらかわぼっせ」のPRにも努めている。様々な場や機会でのブース出展やプログラム提供などと合わせて、活動の場の広がりだけでなく、団体と活動の認知度と理解促進を積極的に図っている。また、広く知られることで子どもの保護者や関係者からの声が届き、スタッフのモチベーションアップにつながり、それが次の活動の充実につながるという好循環として、活動の幅が広がっている。

「あらかわぼっせ」の取り組みは、学生が中心となって自ら主体的に企画・運営を行うだけでなく、幅広い地域の関係者(行政・社会教育関係団体、その他の地域の関係者等)と連携して、相互に関わり合いながら取り組みの充実と拡充を進めている。東京の下町地域であり、比較的コミュニティのつながりが残っている地域であるとはいえ、都市部における社会教育活動の可能性を示す取り組みである。今後、関わる人材の新陳代謝がうまく進み、継続的・長期的な取り組みにつながることを期待したい。

## ◆お問い合わせ：インターネット

「日本青年団協議会」と検索

## ◆学生だけの運営・企画・実践

「あらかわぼっせ」の特徴の一つは、団体が大学生と高校生だけで構成されており、団体運営や事業の企画・実施等をすべて学生だけで行っている点である。荒川区主催の「二十歳のつどい(成人式)」の実行委員をきっかけに、区で生まれ育った大学生等が集まった。子どもたちが自由に過ごせる居場所が減っていることを憂慮し、学生自らの手で居場所をつくらうと動き始め、団体が設立された。

また、活動の主テーマでもある「アート」は、自由な創作の場が減ってきていることを受けて、学生たちが自ら活動の目的を絞って設定したものである。そこで行われる活動の内容だけでなく、場所の確保や活動に必要な資金調達などもすべて学生だけで行っている。団体の立ち上げにあたって、「地域のため・地域の子どものために、自分たちが生まれ育った地域を自分たちでより良くしたい」という想いがあった。これを具現化するため、自ら既存の団体等が行っている活動に参加・体験し、先行者のアドバイスを受けてから進めるなど、自分たちの立ち位置を整理したうえで自発的に取り組むことができていた。やりたいことをただやるだけではなく、自分たちの想いを具現化するための手法として、他の団体にとっても参考になる取り組みである。

## ◆地域の多様な関係者とのつながり

地域との連携が非常にうまく進められてい

**第3回イベントチラシ**

対象：未就学児・小学生

みんなで巨大ダンボールハウスを作ろう！

9月16日(土) 14-16時

会場：サトベリースクール アルマ

お申し込み方法：お申し込みは、お電話またはお申し込み用紙を提出してください。

**第1回イベントチラシ**

布と紙をつかって、つくってみよう！

イベント日時：2023年5月20日 [土] 13:30~16:30

会場：サトベリースクール アルマ

対象：小学校1年生から6年生(保護者の方の付添いがあれば小学生未満のお子さまも参加可)

会場：荒川区生涯学習センター3階第5会議室

参加費：無料

参加方法：予約不要 直接会場へお越しください

主催：あらかわぼっせ

アート×居場所×荒川区

あらかわぼっせ

1 制作を通して居場所や交流の場を作る

2 "自由"に創造できる場の提供

定期的なイベント開催

地元団体さまとのコラボ

最新情報はこちらフォローお願いします

Twitter Instagram

お問い合わせ arakawaposse@gmail.com



ダンボールに絵を描く子どもたち。カラフルな壁やキラキラなドアノブなど、自由な発想でダンボールの家をつくっていく。



第3回イベントではフリースクールと共同でダンボールハウスをつくるイベントを開催。屋内で段ボールを組み立て絵具やペンキで装飾をした。



荒川区の生涯学習フェスティバルに出展。晴れ空の下、子どもたちが思い思いの絵を描いた。



あらかわぼっせ主催の定期イベントでは、自分のなりたいものを身体だけで表現するというイベントを実施した。子どもたちと交流するメンバー。



星裕方さん

1993年生まれ、東京都出身。慶應義塾大学経済学部卒業後、PR会社でPRプランナーとしてのキャリアを重ねる。独立後はフリーランスとして活動しながら、NPO法人に所属し地域活性化事業に携わる。2023年4月より十日町市のミッション型地域おこし協力隊として様々な地域活動に取り組む。



昼間は地元の人と東京から来た人が一緒に棚田の稲刈りで汗を流し、夜は地域の食材を使ったBBQで交流を深める。

# OTHERS

～地域で活動する若者たち～

## vol. 3

### 移住者を呼ぶ棚田の魅力 (新潟県十日町市)

地域には青年団のほかにも若者団体が数多く存在する。多様化が進む社会で、さまざまな団体や立場の人たちと青年団とが力を合わせていけるよう、本企画ではその運営や組織体系、その特色などを紹介していく。

今号では、新潟県十日町市で地域おこし協力隊として活動し、松代地域を中心に棚田の魅力発信に取り組み地域を盛り上げる星裕方さんの実践を取り上げる。

#### ◆人を呼びこむ棚田

昨年9月下旬、筆者は新潟県十日町市の稲刈りに参加した。夜の宴でのヴァイオリンの演奏依頼を受けたのがきっかけだ。主催者から、「この景色を守りたい」という純粋な気持ちから東京と新潟を往来し棚田保全に取り組み、二拠点居住から移住し長年耕作されず放棄されていた棚田を復活させたという話を伺った。都会に住む人々に稲刈り体験の提供と（人手不足にも一役買っている）、美しい自然を共有し、地域の人の人間関係が育まれる。「関係人口」をいかに増やすかが地域課題になっている現代にあつて、この取り組みは非常に上手い。この活動をサポートし、発信している星裕方さんの実践を紹介する。

◆熱量の高いコミュニティと結びつくこと  
星さんが地域の棚田農家の方から聞いた言

葉で印象的だったのが、「観光客はおらの田んぼにゴミは落とさず行ってもお金を落とさず帰る」という言葉。棚田を「見る（観光人口的）」のと、「実際に（関係人口的）」のでは、意味合いが全く変わってくる、とそのとき考えさせられた。では、棚田に「入る」機会をどうしたら多くの方に提供できるか。棚田の関係人口戦略は、そこから始まった。

### ◆内向きの地域活動には限界がある

少子高齢化に伴い、「地元のお祭りを盛り上げよう」といった地域完結型の取り組みには、必ずいつか限界が来る。関係人口をつくるという視点で団体を外から巻き込み、コミュニティを外に広げていく視点も重要ではないだろうか。



▼一般社団法人三乗堂共同代表 森崎 礼子 氏 奈良県出身（写真左）、井村 香澄 氏 長野県出身（写真中央）、中 愛 氏 神奈川県出身（写真右）。2017年発足。寺社仏閣のお像の修理のほか、家庭に保管されているお像の修理も手掛ける。仏像修理師として専念する傍ら、中高生向けの講演やオープンファクトリーでは工房を開放している。

▼日本青年団協議会会長 中 謙 二  
なかぞの・けんじ。1980年生まれ。岡山県倉敷市在住。2008年、岡山県青年団協議会に入会。日本青年団協議会役員を経て、2020年より同会長。

◆対話で芯をそろえる  
（中） 共同代表という言葉は、あまり聞き馴染みがないように思います。実際にやってみてどうですか。  
（森崎） 「仏像を修理したい」という気持ちはみんな一緒だったので、共同代表という形に落ち着きました。

◆自ら環境を整える  
（中） みなさんは、お像の修理を通じて歴史を紡ぎ、そして自分たちで試行錯誤しながら、自分たちの居場所を整えていますね。何か意識していることはありますか。  
（森崎） 代表同士の対話は大切にしています。最近では外部の方ともよく話すようになりました。例えば、経営者の方々の集会へ行き、様々な課題や悩みを共有することで、自分たちの活動にも落とし込んでいます。

（中） 転職活動のよう  
（中） 私たち青年団も昔からある団体なので、それぞれに合わせてやり方を変えていく必要があると感じています。仏像修理師として、歴史を守る大切さと、自分たちの新しいやり方を積極的に模索する大切さを学ばせていただきました。

## リーダーと語る 仏像修理で歴史と 地域の一員に

社会の最前線で活躍する方と語り合い、あらゆる角度から地域を見つめる本企画。今回は、栃木県鹿沼市で文化財の保存修理を行う（一社）三乗堂の共同代表三名と座談会を行った。お像の修理を通じ、対話の大切さや居心地の良い環境づくりについて伺う。

◆過去から未来へ  
（中） 仏像修理師のお仕事について教えてください。  
（中） よく仏師と呼ばれますが、私たちは仏像を新たに作るよりも、修理することを主にやっているため仏像修理師と名乗っています。栃木県日光市輪王寺の現場にたまたま居合わせた3人は、なかなか働き口が見つからないという課題を抱えていました。そこで、自ら就職先をつくった方が早いのではと思い、二人に声をかけたところ快く引き受けてくれたので、団体を立ち上げました。

（中） 誘われた際は どうでしたか。  
（井村） 自分が文化財修理にこれからも関わっていかれると思ったり嬉しくて二つ返事で返しました。今では、施主様との対話を通じて、施主様の大切なものを修理しているという実感がやりがいにつながっています。

（中） 3年前に産休を取得しました。働き方について悩みました。二人に相談したところ、育児と両立できるように調整してくれました。二人に相談したことで良いアイデアをもらえましたし、施主様にも理解していただけたので助かっています。

（中） 環境と言え、みなさん出身地が異なりますね。移住という大きな決断についてはどうでしたか。  
（森崎） 鹿沼市は歓迎してくれる方が多い印象です。お像修理の説明をする場や工芸品／雑貨を販売するイベントに関わったり、中学・高校からの依頼で、仏像修理について講演会も行ったりしています。他にも商工会議所など地元の方々と関わる機会が、徐々に増えています。



●お問い合わせ：インターネットで「一般社団法人三乗堂」と検索

# OPINION 果報は寝て待て

「果報は寝て待て」。これを、幸福は寝て待っていれば自分のところにやってくる、と捉えている人はいないだろうか。本来の意味は、「前世での自分の行いによって生まれた良いもの（果）や悪いもの（報）は、現世で自分に返ってくる」というものである。つまり、何もせず寝ていればいいという意味では全くない。努力が良い結果に結びつくことをふまえ、運は人の力でどうにもできないので、やることをやった後は焦らずに待つのが良い、ということである。

まして現代社会ではどうか。手元の端末で誰とでもつながれる今の世の中では、変化の速度が速く、チャンスも生まれては消えていく。ただ待っているだけでは、幸運を逃しかねない。さらに必要なのが主体性や積極性である。就職活動でも地域での活動でも、自分から仕掛けてアピール

する必要がある。加えて、自身だけでなく誰かのため、社会貢献やボランティアの活動に進んで取り組むことで得られる幸運もある。努力して失敗することがあったとしても、見直したうえで次につなげれば良いし、そのサイクルも早くなっている。ともかく、このことわざが誕生した頃よりも、色々なことに努力を続ける必要がある時代なのかもしれない。

一方で努力し続けると、時に休息もほしくなる。休息を取り、心身をリフレッシュすることも大切だ。焦らず努力を続けることが、手にしたい結果を掴むことにつながる。とはいえ、私たちが暮らす「そうした世界」は少し息苦しくないか。自分へのご褒美と思って早めに布団に入り、寝ながら果報を待つ日があっても良いはずだ。



人と出会う楽しさ

佐藤 朋果さん (19)  
(宮城県・富谷市青年団)

佐藤さんは高校を卒業後ジュニア・リーダーの先輩に誘われて富谷市青年団に入団した。元々ジュニア・リーダーとして活動をしてきた佐藤さん。青年団の活動で最初に参加したゴミ拾いがきっかけで青年団に入団したという。主な活動は、ゴミ拾いやジュニア・リーダーの育成など。最近では定例会中にラジオの収録をして公開する、という新しい取り組みを始めています。ラジオの公開は佐藤さんの発案で、3月に開催された「全国ま

ちづくり若者サミット2024」に参加したことで思いついた。新しい人と出会うことに楽しさを覚え、様々な活動に取り組んできた佐藤さん。初めて参加した日青協の定期大会や3月のサミットで、全国の仲間と出会い楽しい時間を過ごすことができたようだ。

今後の青年団活動では、富谷市の地図を使った謎解きや謎解きをまとめた絵本を制作したいと語る。今後もし佐藤さんの活動を見守っていきたい。

これからも頑張ります！



●大野諒支局員（宮城県青年団連絡協議会）より投稿

## 編集後記

最近、不思議に思っていることがあります。実家でミニチュアダックス（御年15才）を飼っているのですが、その頭にこれまでなかったはずの白い毛がモヒカンのように生えてきているのです。これは人間でいう白髪のようなものなのでしょう。調べたら簡単に出てきそうな気もしますが、もうしばらく謎のままにしておこうと思います。同様のご経験がある方は、ぜひご連絡ください。(み)



最新の情報はこちら  
<https://www.facebook.com/nisseikyo01/>

## はらぺこ青年団

地元の名物を支局員が青年団のエピソードとあわせてご紹介。

栃木県連合青年団では、北方領土返還要求運動栃木県県民会議の事務局を担っており、関連する集会や役員会、総会等を開催しています。そこで定番の食事が、季節ごとにメニューが変わる「レストランロイヤル」のお弁当。会議や事業終了後にお弁当を配布し、持ち帰らずにその場で食べると、なんと温かい味噌汁もついてきます。食事を通じ、県民会議に所属する様々な団体の方々と懇親できたおかげで、今では忘年会等も行う仲になりました。今後も北方領土返還に向け、県民会議参加団体と協力体制を取りながら一層努力していきます。



●高橋信雄支局員（栃木県連合青年団）より投稿